

資料 7

中央教育審議会大学分科会
教学マネジメント特別委員会
(第4回) H31.4.26

教学マネジメント特別委員会（第3回）における主な御意見

1. 議論の進め方に対する御意見

- グランドデザイン答申で示された課題については、本委員会の他にも部会・委員会等が設置されて検討されることとなるが、部会等の連携については考慮いただきたい。

2. 「教学マネジメントについて（案）」（第3回資料3）に対する御意見

- 「大学全体」レベルの中いわゆるガバナンスは入らず、また、「個々の授業科目」レベルにおいても個々の学生に関する問題は取り扱わないと整理しているが、検討に当たっては常に意識してゆくことが必要と考える。
- 「①学修目標の具体化」や「④学修成果の把握・具体化」といった項目名に合わせ、「②授業科目・教育課程」についても「②授業科目・教育課程の編成」とした方が良いのではないか。
- 「③成績評価」は授業レベルのものだと思うので、「学修成果の把握・可視化」の中に位置付けてはどうか。
- 私立大学の特徴でもある準正課・正課外教育やいわゆる教養教育は、そのみで学位プログラムを構成するものではないものの、学位プログラムを支える教育プログラムとして成立している。学位プログラム全体のPDCAだけでなく、それぞれの教育プログラムにおいてもPDCAが回っているという構造が分かるようになるとより良いのではないか。
- アセスメント・ポリシーという言葉は残した方が良いのではないか。
- 教学マネジメントにおいて各レベルにおける検証が重要であることは賛成するが、これを表す言葉としては「アセスメント・プラン」の方が適切ではないか。
- 学位プログラムの成果の点検・評価のために達成すべき質的水準及び具体的実施方法などを制定することは重要であるが、これをアセスメント・ポリシーとすると三つの方針との関係で混乱を招くという意見もあり、あまり混乱の無いよう今後検討していきたい。

3. 授業科目・教育課程に関する御意見

(1) 総論

- 「②授業科目・教育課程」の項目においては、教育課程の編成に当たって留意すべき事項をまとめることが適切であり、「何ができるようになるか」を意識して学修目標を設定すべきという点は、「①学修目標の具体化」に位置付けてはどうか。

(2) アクティブ・ラーニング関係

- 大学における学修においては、専門知識の取得と共に、意見の違う相手と専門知識を活かしながら意見交換をしてゆくコミュニケーション能力の向上も重要である。
- アクティブ・ラーニングは重要だが、目標に応じて適切な教育方法を選択すればよいのであって、目標と合致するのであれば講義形式の授業であっても良いと考える。

(3) ディプロマ・ポリシー関係

- 学位プログラムでの教育目標の具体化も重要だが、複数の学位プログラムを有する大学全体の教育目標の明確化やコンピテンシーの策定についても言及する必要があるのではないか。
- 現代社会が直面している課題に対しては、従来の単線的・垂直的な学問ではなく、従来の専攻を超えた学問や教育の仕組みが必要であり、これが主専攻・副専攻の必要性の根拠でもある。それらは学部や学科の中だけでは提供できず、大学全体でそうした学問・教育をデザインできるようにするためには、大学全体のレベルでのディプロマ・ポリシーの設定が重要ではないか。
- 過度に抽象化されたディプロマ・ポリシーからは、私立大学における建学の理念に基づいた教育目標のように、大学の個性は見えてこないのではないかと思われる。どういった人材を育成するのが理念としても表れている方が良いのではないか。
- ディプロマ・ポリシーを抽象化すると、カリキュラムマップを作成する意味が乏しくなるものと考えられる。指針においてマップ・ツリーいずれも作成すべきとすると、反発が生じるのではないか。
- ディプロマ・ポリシーを細分化しすぎても意味が無いという指摘は重要であり、各大学の工夫に委ねられるというのが最終的な合意ではないか。他方で抽象化しすぎると意味が無くなるので、その加減をどうするかは大きな課題であろう。

(4) カリキュラムマップ・ツリー関係

- ディプロマ・ポリシーを抽象化すると、カリキュラムマップを作成する意味が乏しくなるものと考えられる。指針においてマップ・ツリーいずれも作成すべきとすると、反発が生じるのではないか。(再掲)
- カリキュラムマップの作成は、カリキュラムを見直す上で有効な手段ではあるが、ディプロマ・ポリシーの達成に向けて作り込むと、不要な科目の排除が行われることとなり、科目の多様性が圧縮され、全て必修科目になるというのが究極の姿と考えられるが、こうした点が多く大学の大学にとって納得できるような説明が指針に盛り込まれると良いのではないか。
- ディプロマ・ポリシーで示された目標に対してカリキュラムがどのように対応しているかを示すためにはカリキュラムマップ・ツリーの作成が不可避であり、これらによって具体化された目標を前提として、学修成果を可視化してゆくことが重要である。また、例えば米国でも適確認定団体の半数はカリキュラムマップの提出を必須としているなど、国際通用性という観点からも重要である。
- カリキュラムマップ・ツリーの作成には負担が伴うが、これらの作成を通して大学全体のレベルと個々の授業科目レベルをつなぐことができ、カリキュラムの内容を具体的に議論することができることから、学内における教育改善やカリキュラム評価において重要なコミュニケーションツールとなる。

(5) ナンバリング関係

- ナンバリングの目的を大学間での単位互換やGPAによる質保証に求めるのであればナンバリング独自の意味があるが、学位プログラムにおける各科目の位置付けを確認する目的のみであれば、カリキュラムツリーだけあれば足りるとも考えられる。この点についても議論が必要ではないか。

(6) その他

- 教学マネジメントに関する事例集の作成や事例報告会の開催なども検討いただきたい。
- 学修者本位の教育という観点からは、学生の能力や意欲、時間を踏まえたプログラムの提供が重要である。学生が学修に使える時間は有限であり、その中で学生に最高の学びを提供するためにその意欲を引き出すための様々な仕掛けを組み込んでいく、という観点がなければ、学修者本位の教育にはならないのではないか。

- 学位プログラムと教育プログラムという用語の整理が必要ではないか。
- 大学設置基準第13条及び別表第2は、大学に共通する教育を提供するための教員の配置を求めるものであるところ、最近の大学ではその精神があまり活かされていないのではないか。大綱化以降、別表第2の教員をどのように扱うべきかは、今後の課題なのではないか。

4. その他の御意見

- 学修者本位の教育という観点から、諸外国がどのような教育を提供しているのか、今後議論できれば良いと思う。
- 卒業論文は大学の学修成果を計る上で重要な位置を占めていると考えられ、海外と比較しても我が国の優れた制度と考えられる。学修成果の可視化にもつながるものであり、教学マネジメントの充実の上で活かすべきと考える。

(以上)